





研究者名※	青木みのり AOKI Minori	学位※	博士(人文科学) 文学修士
所属※	人間社会学部 心理学科	職名※	教授
連絡先	aokim@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read0207988		
研究分野※	臨床心理学		
研究キーワード※	心理面接過程 非言語コミュニケーション		
共同研究・競争的資金等の研究課題	対人的楽観性に焦点を当てた抑うつ予防的アプローチ法の開発(科学研究費、基盤研究(C)、研究分担者、2014~2018年) 対人的楽観性に焦点を当てたメンタルヘルス改善のための統合的アプローチ法(科学研究費、基盤研究(C)、研究分担者、2018~2022年)		
社会貢献・産学官連携活動等	日本心理臨床学会代議員(2017年11月~)、日本心理臨床学会機関誌編集委員(2018年8月~)、公認心理師現任者講習会 講師(2018年4月7, 8日)、家庭裁判所調査官養成課程後期合同研修「面接技法演習 I」講師(2018年10月~) 東京都民生委員連合会研修会講師(2019年2月~)		
受賞歴	日本教育心理学会 城戸奨励賞(1994年) 日本応用心理学会 学会賞(奨励賞)(2019年)		

研究領域	心理的支援、コミュニケーション、 スクールカウンセリング、 家族支援	(SDGs)		
研究テーマ※	クライアントの主体性を支援する心理療法			
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	<p>【研究の背景・目的・内容】 心理療法の究極の目的は個人が主体的に生きることを支援することである。そこでクライアント自身が自らの持つ力を見出し活かせるようサポートすることが欠かせない。そのための具体的な方法論として、ヒューマンスティックアプローチや解決志向アプローチを基盤とし、心理療法のみならず影響について明らかにすることを目的とした。クライアントにとって望ましい心理療法の在り方を探るため、解決志向アプローチの面接を通じた問題のイメージの変化を質的研究であるPAC分析とM-GTAを用いて明らかにし、「認識と関わりの主体」モデルを生成した。</p> <p>【応用例、研究の展望】 展望として、心理的支援において、クライアントの視点からの認識を検討する際に有効であると考えている。研究の今後の展望としては、生成された仮説理論である「認識と関わりの主体」モデルに関して、社会的活動としての心理面接の事例検討を通じて応用可能性を検討した(青木・井上、2016)。応用例として、解決志向アサーティブネストレーニング(望月・青木、2020)を考案し、ドメスティック・バイオレンスや虐待などの被害にあいトラウマを抱えた個人や、家族内コミュニケーションの支援に役立っている。</p> <p>【研究方法の特色】 ①質的研究法を用い、ユーザーの視点から心理療法や介入プログラムの効果をとらえた。また、PAC分析とM-GTAという2つの質的分析を組み合わせることで、より深い語りを引き出すことが可能になった。 ②量的な指標を用いることで、他の研究との比較可能性や客観性を持たせるよう配慮した。</p>			
本研究関連特許・論文等	<ul style="list-style-type: none"> ・青木みのり・井上恵理 2016 質的研究により生成された仮説理論の実践に向けて―「認識と関わりの主体」モデルを例として―. 応用心理学研究第41巻第3号, 308-316 ・青木みのり 2019 「クライアントの視点」再考(日本女子大学叢書22) 晃洋書房刊 ・望月由紀子・青木みのり 2020 家族との程よい関係を目指し解決志向アサーティブネストレーニングを用いた事例 ブリーフサイコセラピー研究, 29, 16-28. 			
共同研究・外部機関との連携への期待	<ul style="list-style-type: none"> ・家族内コミュニケーション支援への応用 ・スクールカウンセリングにおける応用 			